

津山市内遺跡調査報告書

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第83集

# 津山市内遺跡調査報告書

平成22～24年度

指定文化財（古墳）測量調査

美作国府跡発掘調査

西吉田地区試掘調査

津市教育委員会

2014

津市教育委員会

# 津山市内遺跡調査報告書

平成22～24年度

指定文化財（古墳）測量調査

美作国府跡発掘調査

西吉田地区試掘調査

2014

津山市教育委員会



## 序

津山市は、合併による市域の拡大に伴って遺跡数が大幅に増加しました。また、指定文化財についても合併した旧自治体の指定文化財を全て津山市の指定文化財とし、その保護と継承をはかっています。

津山市教育委員会は、文化財保護担当部局として、開発事業に伴う対応や古墳などの埋蔵文化財の保護など、埋蔵文化財保護行政の推進にも努めているところです。

本報告書は、津山市教育委員会が各種開発事業及び指定文化財の資料整備を目的として、平成 22 年度から平成 24 年度に実施した、市内遺跡発掘調査等事業（国庫補助事業）にかかる測量調査および発掘調査の報告書です。事業の実施によって、資料の蓄積が図られるとともに、従来の評価に対して新たな知見というべきデータを得ることができます。など、貴重な成果を得ることができたと考えております。

本書は小冊子であります、地域史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行まで多大なご支援をいただきました地権者をはじめとする関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

津山市教育委員会

教育長 田 村 芳 倫

## 例　言

1. 本書は、平成 22 年度から平成 24 年度に実施した、津山市内遺跡発掘調査等事業概要報告書である。
2. 本書掲載の調査事業は、全て国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として津山市教育委員会が実施した。調査は、国分寺飯塚古墳測量調査が津山市教育委員会文化財課（現津山市都市建設部歴史まちづくり推進室）職員平岡正宏、その他は津山市教育委員会文化課（津山弥生の里文化財センター）職員仁木康治が担当した。
3. 本書の執筆は仁木が行った。また、編集は平岡が行った。
4. 本書に用いた方位は磁北で、レベル高は海拔高である。実測図に示した高さの単位は m である。なお、西吉田地区試掘調査報告においては座標の取り付けを行っていないため、報告書抄録の座標は調査範囲のほぼ中心と思われる位置を国土地理院のデータを参照し記載した。
5. 遺構実測図の土層注記の表示に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（2004 年度版）に準拠している。
6. 出土遺物及び図面類は、津山弥生の里文化財センター（津山市沼 600-1 番地）に保管している。
7. 本書の全てのデータは PDF フォーマット及び Adobe InDesignCS 形式で保管している。

## 目 次

|                  |    |
|------------------|----|
| 第1章 調査事業の概要と調査体制 | 1  |
| 第2章 測量調査         | 5  |
| 第1節 国分寺飯塚古墳測量調査  | 5  |
| 第2節 龍王塚古墳測量調査    | 7  |
| 第3節 大日古墳測量調査     | 9  |
| 第4節 地蔵二つ塚古墳測量調査  | 11 |
| 第3章 美作国府跡発掘調査    | 13 |
| 第1節 調査に至る経過      | 13 |
| 第2節 調査の概要        | 13 |
| 第3節 まとめ          | 24 |
| 第4章 西吉田地区試掘調査    | 25 |
| 第1節 調査に至る経過      | 25 |
| 第2節 調査の概要        | 25 |
| 第3節 まとめ          | 32 |

## 図 目 次

|                              |                                |
|------------------------------|--------------------------------|
| 第1図 津山市位置図                   | 第17図 土壙4・5・10・11平・断面図 (S=1/40) |
| 第2図 国分寺飯塚古墳位置図 (S=1/25,000)  | 第18図 土壙6平・断面図 (S=1/40)         |
| 第3図 国分寺飯塚古墳測量図 (S=1/750)     | 第19図 土壙7平・断面図 (S=1/40)         |
| 第4図 龍王塚古墳位置図 (S=1/25,000)    | 第20図 土壙8・9平・断面図 (S=1/40)       |
| 第5図 龍王塚古墳測量図 (S=1/750)       | 第21図 土壙12平・断面図 (S=1/40)        |
| 第6図 大日古墳位置図 (S=1/25,000)     | 第22図 方形石積土壙平・断面図 (S=1/40)      |
| 第7図 大日古墳測量図 (S=1/300)        | 第23図 出土遺物 (1) (S=1/2・1/4)      |
| 第8図 地蔵二つ塚古墳位置図 (S=1/25,000)  | 第24図 出土遺物 (2) (S=1/4)          |
| 第9図 地蔵二つ塚古墳測量図 (S=1/500)     | 第25図 西吉田地区試掘調査                 |
| 第10図 美作国府跡調査位置図 (S=1/25,000) | 調査位置図 (S=1/25,000)             |
| 第11図 造構配置図 (S=1/100)         | 第26図 トレンチ配置図 (S=1/2,000)       |
| 第12図 溝1平・断面図 (S=1/40)        | 第27図 トレンチ平・断面図 (1) (S=1/80)    |
| 第13図 溝2平・断面図 (S=1/40)        | 第28図 トレンチ平・断面図 (2) (S=1/80)    |
| 第14図 溝3・石列平・断面図 (S=1/60)     | 第29図 トレンチ平・断面図 (3) (S=1/80)    |
| 第15図 溝4平・断面図 (S=1/40)        | 第30図 出土遺物 (S=1/4)              |
| 第16図 土壙1・2・3平・断面図 (S=1/40)   |                                |

## 図版目次

|                     |                  |
|---------------------|------------------|
| 図版1 国分寺飯塚古墳全景（北東から） | 図版13 西吉田地区試掘調査   |
| 龍王塚古墳全景（南西から）       | 調査位置南半遠景（東から）    |
| 図版2 大日古墳全景（北西から）    | 調査位置北半遠景（東から）    |
| 地蔵二つ塚古墳全景（南から）      | 図版14 T-1（北から）    |
| 図版3 美作国府跡発掘調査       | T-2（北西から）        |
| 調査地遠景（南東から）         | T-3（南東から）        |
| 調査区全景（西から）          | T-4（西から）         |
| 図版4 方形石積土壤（南から）     | T-5（東から）         |
| 同（南東から）             | T-6（北西から）        |
| 図版5 土壌1（南東から）       | T-7（北東から）        |
| 土壌2・3（北東から）         | T-8（西から）         |
| 図版6 土壌4（南西から）       | 図版15 T-9（西から）    |
| 土壌5・10・11（西から）      | T-10（東から）        |
| 図版7 土壌6（西から）        | T-11（北西から）       |
| 土壌7（南西から）           | T-12（北西から）       |
| 図版8 土壌8・9（西から）      | T-13（東から）        |
| 土壌12（南から）           | T-14（西から）        |
| 図版9 溝1（東から）         | T-15（西から）        |
| 溝2（南から）             | T-16（西から）        |
| 図版10 溝3と石列（東から）     | 図版16 T-17（南から）   |
| 溝4（北から）             | T-18（南西から）       |
| 図版11 作業状況（西から）      | 作業状況（T-2）（南から）   |
| 出土遺物（1）             | 作業状況（T-16）（北西から） |
| 図版12 出土遺物（2）        | 出土遺物             |

# 第1章 調査事業の概要と調査体制

## 第1節 調査事業の概要

津山市は、岡山県の北部に位置し、人口約10万5千人、面積506.36km<sup>2</sup>を測る地方都市である。市北端は鳥取県に接し、標高1,000m級の中国山地が連なる。また、市の西部及び南部は吉備高原に接し、中心部は盆地状の地形を呈する。これらの間を縫うように岡山県三大河川の一つである吉井川が流れ、瀬戸内海に注ぐが、地勢上の条件から地域ごとの気象の差が著しい。

旧分国では美作国に属し、古代には国府と国分寺がおかれた。中世には守護所がおかれて、近世には津山城が築城されて城下町が整備された。一貫して県北の政治経済の中心地の役割を果たしてきたが、現在は雇用機会や人口の減少と高齢化に歯止めがかからず、関係者の努力が続いている。

本書所収の報告は、指定文化財（古墳）測量調査、美作国府跡発掘調査及び西吉田地区試掘調査の3事業である。

指定文化財（古墳）測量調査は、埋蔵文化財（古墳）の測量調査事業である。津山市は、平成17年の合併に伴って旧津山市に加えて周辺4町村が合併して現在の市域となった。旧自治体の指定文化財は、そのまま新津山市の指定文化財として引き継がれたが、史跡のうち、古墳について埴丘測量図の不備をはじめとする基礎資料不足が指摘された。このため、基礎資料の蓄積を図ることを目的として、津山市教育委員会は古墳の測量事業を企画した。平成22年度から事業着手し、平成24年度までに4か所（古墳5基）の資料化を行った。

美作国府跡発掘調査は、個人農地の整備に伴う発掘調査である。平成22年度に、土地所有者による農地の整備が計画された。工事着手前に実施した確認調査の結果、遺構があることが明らかになったため発掘調査を実施し、記録保存処置をとったものである。

西吉田地区試掘調査は、津山市南東部に位置する西吉田地区のは場整備事業に伴う試掘調査である。事業担当課からの照会によって現地踏査を行った結果、遺跡の存在する可能性があると認められたことから、平成23年度に事業予定地全てを対象として試掘調査を実施した。

なお、事業ごとの調査経過については、それぞれの該当部分を参照されたい。

## 第2節 調査体制

本書記載の調査事業は、全て津山市教育委員会が国庫補事業として実施した。各年度別の調査体制は次頁の通りである。また、平成25年度については報告書作成業務を行った。

なお、本市における文化財保護担当部局は、平成20年4月の組織改編に伴い、旧文化課から芸術文化関係業務を市長部局に移管し、文化財保護担当部局として文化財課に改組された。さらに、平成23年4月の組織改編に伴い、教育委員会が学校教育部と生涯学習部の2部制となったことに関連し、再び旧に復したかたちで文化課に改組されて現在に至っている。



第1図 津山市位置図

平成 22 年度

津山市教育委員会

教育長

田村芳倫

文化財課長兼弥生の里文化財センター所長

行田裕美

文化財課主幹兼文化財保護係長兼弥生の里文化財センター次長

小郷利幸

文化財課主査兼弥生の里文化財センター主査

平岡正宏（測量調査担当）

同

仁木康治（発掘調査担当）

平成 23 年度

津山市教育委員会

教育長

田村芳倫

生涯学習部長

行田裕美

文化課長兼弥生の里文化財センター所長

赤松直人

文化課主幹兼文化財保護係長兼弥生の里文化財センター次長

小郷利幸

文化課主査兼弥生の里文化財センター主査

仁木康治

（発掘調査・測量調査担当）

平成 24 年度

津山市教育委員会

教育長

田村芳倫

生涯学習部長

行田裕美

文化課長兼弥生の里文化財センター所長

竹内清起

文化課主幹兼文化財保護係長兼弥生の里文化財センター次長

小郷利幸

文化課主査兼弥生の里文化財センター主査

仁木康治（測量調査担当）

平成 25 年度

津山市教育委員会

教育長

田村芳倫

生涯学習部長

行田裕美

文化課長

谷口善洋

文化課主幹兼文化財保護係長兼弥生の里文化財センター所長

小郷利幸

文化課主査兼弥生の里文化財センター次長

仁木康治（報告書作成担当）

出土遺物の整理作業は、文化財センター野上恭子、田潤千香子、春名博美、宗本節子が担当した。

また、発掘作業については、公益社団法人津山市シルバー人材センターに委託した。作業に従事していた方は次のとおりである。

高畠貞男 藤島 進 竹花 修 内田英文 鈴木康之 田淵治平 石田久志 小林修一 高山尚嗣  
山本洋一 片岡計介 （順不同 敬称略）

なお、調査実施から報告書作成にあたり、文化財センター職員各位及び以下の団体・個人の協力を得た。記してあつく御礼申し上げます。（いずれも順不同 敬称略）

(国分寺飯塚古墳測量調査)

中島正彦 大野木美津子 (株) イレブンフーズ

(龍王塚古墳測量調査)

池田直司 美松武子 早瀬一幸 村田隆男

(大日古墳測量調査)

池田 駿 近藤岩夫 大嶋功宏 津山市宮尾町内会

(美作国府跡発掘調査) 小林繁行

(西吉田地区試掘調査)

神崎博彦 稲垣圭一 稲垣弘美 山本義之 神崎 浩 神崎昌徳 稲垣比都美 津山市  
西吉田町内会

(以上地権者)

岡山県教育庁文化財課 津山市都市建設部公園緑地課 津山市産業経済部農村整備課 津山市地域  
振興部久米支所産業建設課



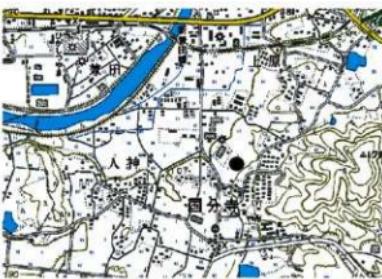
## 第2章 測量調査

### 第1節 国分寺飯塚古墳測量調査

#### 1. 所在地と周辺の遺跡

国分寺飯塚古墳（岡山県遺跡番号：1001 以下同じ）は、津山市国分寺 213 番地ほかに所在する。標高 179 m の観音山から北西方に派生した尾根の先端部に位置し、加茂川と吉井川の合流点を遠望する。墳丘規模は径 35 m の円墳で、高さ 6 m、墳頂の平坦部径は 10 m を測るとされる。墳頂平坦部には、径 3 m、深さ 0.3 m 程度の浅い盗掘壙が見られる。

墳丘の遺存状態そのものは良好で、均整な円錐形を呈し、墳丘斜面には拳大の円錐による葺石が散見される。発掘調査履歴は不明で、内部主体の規模・構造等は分かっていない。出土遺物としては、墳丘



第2図 国分寺飯塚古墳位置図 (S=1/25,000)

斜面からの埴輪が発見されているが、詳細な築造時期を押える資料は乏しい。津山市史跡指定は昭和 40 年 7 月 1 日付である<sup>(注1)</sup>。

周辺には、現在は消滅しているが、かつて 4 基ないし 5 基の古墳が所在（996～999）したという。本墳との関係は不明である。国分寺河原田遺跡（995）は、昭和 30 年頃に瓦・勝間田焼などが出土したとされる<sup>(注2)</sup>。また、東方の丘陵上には、河辺上原 1 号～4 号墳（1010～1013）及び河辺上原遺跡（1014）がある。河辺上原 1・2 号墳は径 16.5 m、3 号墳は径 10 m 以上の円墳で、何れも 6 世紀前半～中頃の築造である。河辺上原遺跡は、弥生時代を主体とする集落遺跡である<sup>(注3)</sup>。

本墳の墳丘規模からみると、津山市二宮の美和山 2 号墳・3 号墳（365・366）と規模・特徴が類似することなどの要素から、本墳から約 2 km 北東に所在し、5 世紀末に位置づけられる井口車塚古墳（783）に先行する首長墓とみられている<sup>(注4)</sup>。

#### 2. 測量調査の概要と観察所見

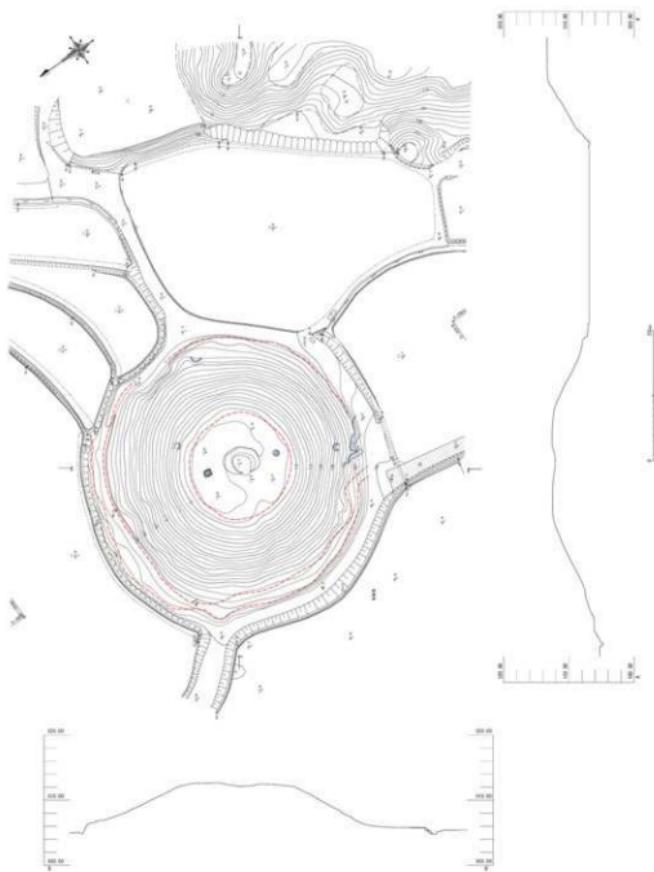
古墳は、丘陵端部に築かれ、極めて整然とした墳形を示す。定期的な草刈作業がなされていることから現地への立ち入りも容易で、測量調査は土地所有者の承諾を得たのち、調査担当者の指示のもと測量業者に委託して実施した。

調査は、平成 22 年 12 月 3 日から着手し、平成 23 年 1 月 11 日に終了した。現地での観察所見は、墳頂部のわずかな変形を除いて現況として遺存状況は極めて良好であり、新たな墳丘の崩落等も確認されず、周辺についても特に地形的な改変は行われていなかった。調査中に遺物は確認できなかった。

#### 3. 測量成果とまとめ

測量成果からみると、本墳の規模は、概ね標高 106.75 m～107.25 m 付近の傾斜変換点を墳端として、径 38 m、高さ 5.5 m、墳頂の平坦部径 15 m の数値が得られた。これは、直径と平坦部の径に関しては従来の数値より若干大きめであるが、基本的に従来の見解を補完するデータである。

また、墳丘の周囲には幅 1 m 程度のテラスが設けられている可能性が読み取られ、これをテラスとみるならば墳丘は 2 段築成となる。その場合の墳端は、上段が先述の規模で、下段が墳丘北側では水田畦畔、他の箇所では里道あたりとなるとみられ、径 43 m、高さ 6.5 m の規模となる。しかし、測量成果から規模を確定するのは困難であるため、発掘調査等による確実な墳端の把握が必要である。



第3図 国分寺飯塚古墳測量図 (S=1/750)

なお、墳形については、尾根が伸びる南東から北西方向にやや引き伸ばされた印象がするものの、極めて均整のとれた墳形を示し、この地域で築造された古式首長墳の典型的な例となると思われる。

註1 「国分寺飯塚古墳」『津山市の文化財』 津山市教育委員会 2008

註2 「改定 岡山県道路地図」 岡山県教育委員会 2003

註3 小郷利幸 平岡正宏「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』 津山市教育委員会 1994

註4 小郷利幸「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』 津山市教育委員会 1994

## 第2節 龍王塚古墳測量調査

### 1. 所在地と周辺の遺跡

龍王塚古墳（岡山県遺跡番号：久米町 349 以下同じ）は、津市久米川南 2,685 番地に所在する。吉井川に面した丘陵頂部に位置し、吉井川を眼下に見下ろす位置にある。古く盗掘を受けた際、玉・刀類が出土したと伝えられているが、現存しない。前方部を東に向かって全長 67m の前方後円墳とされ、墳頂には大師堂が祀られている。築造時期の情報はない。付近の標高は約 128m で、周辺との比高差は最大 12m 程度である。昭和 44 年 10 月 9 日付で旧久米町指定文化財（史跡）に指定、のち津市指定文化財（史跡）に引き継がれている。

古墳の名称は、遺跡地図記載の名称は「足山 1 号墳」で、指定文化財としての名称は「龍王塚古墳」である。渴水時に雨乞い神事が行われたことに由来するともいう。本稿においても指定文化財の名称で報告する。

本墳は、丘陵の東端に位置し、西方の丘陵中央付近に「三刺塚」ともいう足山 2 号墳（350）、丘陵の西端に足山 3 号墳（351）がある。足山 2 号墳は、明治末もしくは大正初期に石材採取と大規模な盗掘にあり、鉄剣（刀？）3 本・鐵鏟・鉗・馬具・須恵器などが出土したといい、それらを祀ったため「三刺塚」の名がある。一説には弘化年間の盗掘ともいう。陶棺を内蔵する径 17m 程度の横穴式石室を有する古墳とされる。

足山 3 号墳は、墳長 29m の小型の前方後円墳で、前方部を西に向かっている。また、龍王塚古墳と足山 2 号墳間の丘陵及び現在の足山集落には、弥生土器・須恵器片が散布し、集落遺跡の存在が想定（348 足山遺跡）されている（図 1-2）。

### 2. 測量調査の概要と観察所見

龍王塚古墳は、後円部墳頂に大師堂があることから後円部の約 3/5 は草刈等がなされ、立ち入りは容易であった。それ以外の箇所については風倒木が著しく、現地確認にも相当の困難を伴った。このことから、測量調査は、土地所有者の承諾を得たのち現地の下刈り作業を行い、現地に立ち入りが可能になってから、調査担当者の指示のもと測量業者に委託して実施した。

調査は、平成 24 年 2 月 15 日から着手し、平成 24 年 3 月 13 日に終了した。調査前の現地での観察所見は、くびれ部から前方部にかけては幾度かの開墾及び土取りによって大きく改変され、地上観察では墳丘の形を留めていないことが確認された。特に墳丘の東及び北東部分の地形改変が著しく、後円部墳端から若干テラス状の地形が残るが、以下は完全に削平された状況であった。

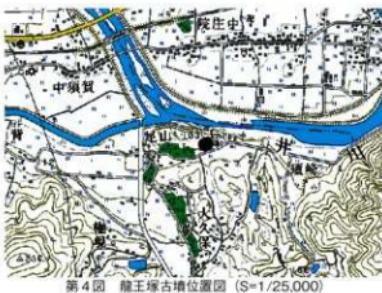
加えて、削平に伴う盛土の流出を考慮に入れても、後円部に対してくびれ部が極端に低いことも疑問点となつた。過去の遺跡調査票によると、葺石の二次的な集積が認められるとの記述があったが、これについても若干の転石が確認できた程度で、葺石がどうかの判断はつかなかった。

また、後円部からくびれ部にかけての斜面及び後円部墳丘南側においても、墳丘を削平してテラス状に平面が造り出されて大きく変形し、後円部南西の墳頂近くも、土取りによって墳丘上の約 4m の範囲が L 字状に削り取られていた。

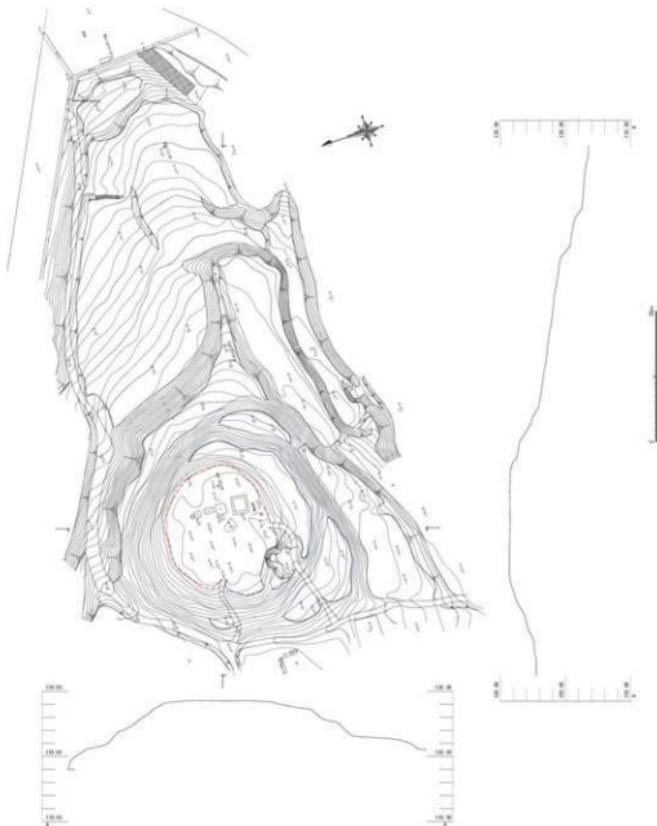
対して、後円部の北西側から西側にかけては、旧状を比較的よく留めていることが観察された。段塗や外表施設については現状では確認できず、遺物についても確認できなかつた。

### 3. 測量成果とまとめ

測量図から龍王塚古墳の墳丘を見た場合、前方後円墳とみなすには相当の困難を伴う。現地での観察所見



第4図 龍王塚古墳位置図 (S=1/25,000)



第5図 龍王塚古墳測量図 (S= 1/750)

でも述べたように、墳丘、特に前方部とされる部分の削平が著しいことに加え、後円部とくびれ部の高低差がありすぎ、くびれ部そのものも判別できないことが測量図上からも指摘される。また、後円部墳丘の北東部分にみられるテラス状の部分についても、本来くびれ部があるべき場所にまで及んでいるような状況であり、むしろ自然地形とみた方がより妥当ではないかと思われる。

前方後円墳とみた場合には、後円部における標高125m付近の傾斜変換点を墳裾とみなし、東に延びる舌状の高まりを前方部とみれば墳長約60mとなり、従来の数値にやや近い。この場合後円部高、後円部径、前方部長はそれぞれ35m、32m、28mの数値となる。

本墳については、観察所見の要素を加味して、先ほど述べた後円部北東部分のテラス状の平坦面を自然地形とみなし、現状で径32m、高さ3.5mの円墳である可能性を併せて指摘しておきたい。

註1 「改定 岡山県道跡地図」 岡山県教育委員会 2003

註2 久米町史編纂委員会「久米町史 上巻」 久米町教育委員会 1984 pp234-238

### 第3節 大日古墳測量調査

#### 1. 所在地と周辺の遺跡

大日古墳（岡山県遺跡番号：久米町159 以下同じ）は、津山市宮尾913番地に所在する。津山市くめ（大字名）と、苦田郡鏡野町との境をなす山塊から南向きに派生した丘陵性山地の末端で、久米川と河川に伴う低地を見下ろすことのできる尾根上に築造された単独墳である。本墳は、一般的には一辯30m～35mの美作地方最大の方墳として周知されているが、方墳であるという意見と、方形の台上に円墳が乗った形態を持つとの2種の解釈がある。

付近の標高は約140mで、周辺との比高差は約30～35mである。この地域の首長墓のひとつとみられ、墳丘規模や葺石の所在から古墳時代前期の築造が考えられている。

古墳の名称は、遺跡地図記載の名称は「大日1号墳」で、指定文化財としての名称は、「大日古墳」である。名称の由来は、大日堂が墳頂にあったため現在の名称で呼ばれている。昭和43年3月19日付で旧久米町指定文化財（史跡）に指定され、津山市指定文化財（史跡）に引き継がれている。本稿においては指定文化財の名称で報告する。

周辺の遺跡は、西方に久米郡郷比定遺跡として著名な宮尾遺跡（137）があり、北東には大日2号墳（160）、同3号墳（161）がある。大日2号墳は、内部主体とされる箱式石棺様の石材が露出し、大日3号墳は、径15.5m、高さ1～3mの円墳とされる。また、南には久米丸山1号墳・2号墳（163・164）、北西には野辺1号墳～5号墳（143～147）がある。これらのなかには、陶棺を内蔵する古墳もあり、発掘調査等が行われていないため情報が乏しいものの、6世紀末から7世紀を下限とする、時期の異なる大小の古墳が点在する状況を示している<sup>(注1)</sup>。

#### 2. 測量調査の概要と観察所見

本墳は、墳丘部分を除いて周囲は植林されている。古墳の南側及び西側については、元は水田もしくは畠とみなされ、のち山林化したとみられる状況であった。測量調査は、あらかじめ土地所有者の承諾を得たのち、調査担当者の指示のもと測量業者に委託して実施した。

調査は、平成25年2月7日から着手し、平成25年3月6日に終了した。調査時の所見は、古墳の南から墳頂へはかつての大日堂への参道が明確に残り、当該部分は墳丘の変形が明瞭に認められた。また、墳丘北側には東西に里道が通じているが、北側の山地から墳丘を切断した地形変更の痕跡が使用されているとみられ、付近の墳丘は土砂採取と推定される変形がみられた。

大日堂跡には現在は小祠が祀られているが、堂宇の設置のため墳頂部は削平を受けており、現状では長径約12m×短径約10mの不定型な平面を呈し、中央にかけてやや窪地状になっている。本墳の内部主体については、「墳丘中央部を外れた位置に、板状割石積みの小型石室一基」が確認されたとされる<sup>(注2)</sup>が、調査の際には現認できず、情報は得ることができなかった。

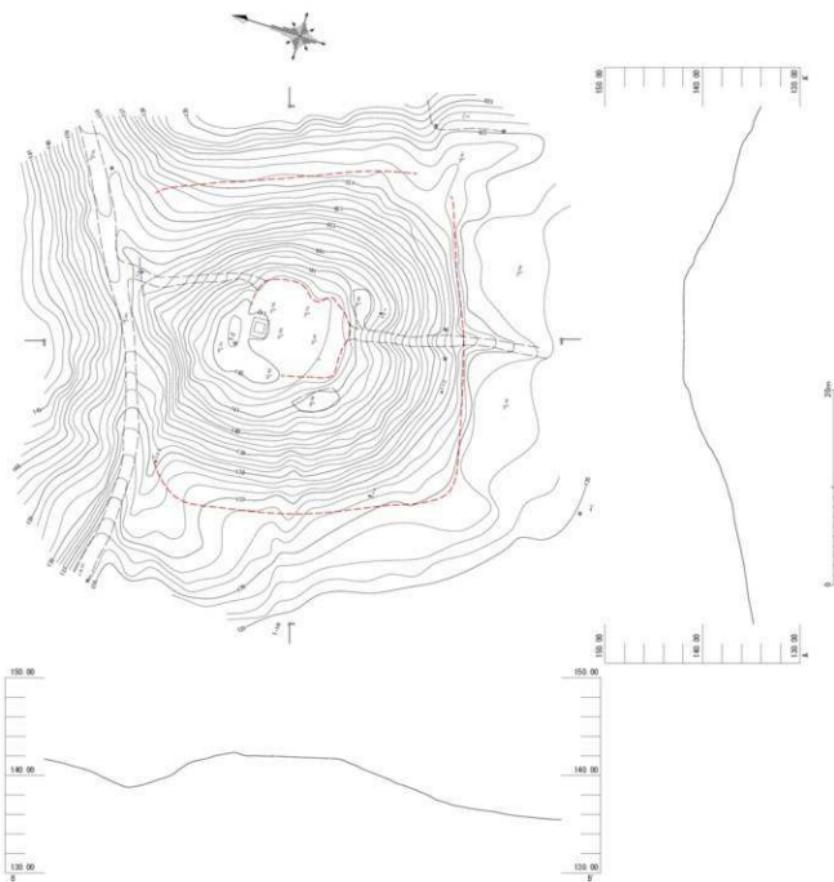
また、墳丘のところどころで河原石が散在していたことから、外表施設として葺石を持つものとみられる。埴輪などの遺物等は採取されなかった。

#### 3. 測量成果とまとめ

測量成果からみる本墳の規模は、標高137m付近の傾斜変換点を墳裾とみなすと、一辯34m、高さ5mの規模の方墳とみることができる。測量成果から判断された墳形及び規模について、従来からの見解を補



第6図 大日古墳位置図 (S=1/25,000)



第7図 大日古墳測量図 (S=1/300)

完するデータを得たと判断される。

ただし、墳丘北半が比較的シャープな形状を示しているのに対して、特に墳端の南東、南西隅については測量図で見る限り等高線の廻り方がかなりダルで、明瞭なコーナーを示していない。また、前述の方形台状の地形については、テラスとも解釈することができるが、その場合は2段築成となる可能性がある。墳裾部が改変されていることから、現時点では判別し難い。南東及び南西コーナーの等高線が舌状に廻ることから、盛土の流出等の要因による墳丘の変形と理解しておきたい。

註1 「改定 岡山県道路地図」 岡山県教育委員会 2003

註2 近藤義郎編『岡山県の考古学』 吉川弘文館 1987 pp286-287

## 第4節 地蔵二つ塚古墳測量調査

### 1. 所在地と周辺の遺跡

地蔵二つ塚古墳（岡山県遺跡番号：久米町 291・292 以下同じ）は、津山市久米川南 316-1 番地に所在する。標高 261 m の稼山を頂点とする山塊から北方向に張り出した、津山市久米川南と神代の境界にあたる標高約 253 m の尾根頂部に築造され、2 基の古墳で構成される。周辺との比高差は約 80 ~ 120 m で、北東にあたる津山市宮尾から院庄方面への眺望が非常に良好な位置である。

本古墳群は、昭和 44 年 10 月 2 日付で旧久米町指定文化財（史跡）に指定され、津山市指定文化財（史跡）に引き継がれている。遺跡地図記載の名称は「二つ塚 1 号墳・二つ塚 2 号墳」で、指定文化財としての名称は、「地蔵二つ塚古墳」を使用しているが、同一の古墳である。本稿においても指定文化財の名称で報告する。

地蔵二つ塚古墳は、2 基の古墳のうち北側のものを 1 号墳、南側を 2 号墳と呼称する。従前の見解によると、1 号墳は径 16 m、高さ約 1 m の円墳、2 号墳は径 7 m、高さ約 0.8 m の方墳とされていた。出土遺物等についての情報はなく、築造時期等についても不明とされている。墳頂には、かつては名称の由来である地蔵があったが、これについても現存しない<sup>(注1)</sup>。

周辺には、同一尾根の標高約 240 m 付近に、同じく市指定史跡である長者屋敷（282）がある。丘陵頂部を削平したとみられる平坦面が観察でき、付近では弥生土器片が表採されているとされるが、詳細についてはわからない。

また、北東方向に派生した尾根上には、金鋸場 1 ~ 5 号墳（285 ~ 289）1 号墳は津山市指定史跡名称「鋸場古墳」がある。径 11 m 程度を最大規模とする円墳及び一辺約 16 ~ 17 m の規模の方墳、計 5 基で構成されるが、詳細には不明な点も多い。この地域の傾向として、単独墳または小規模な古墳群が散在する傾向が伺える。

加えて、金鋸場池の周辺尾根一帯には高後岩遺跡（294）が分布する。部分的な調査成果であるが、弥生時代後期及び古墳時代の住居址、土壙などが確認されている<sup>(注2)</sup>。

### 2. 測量調査の概要と観察所見

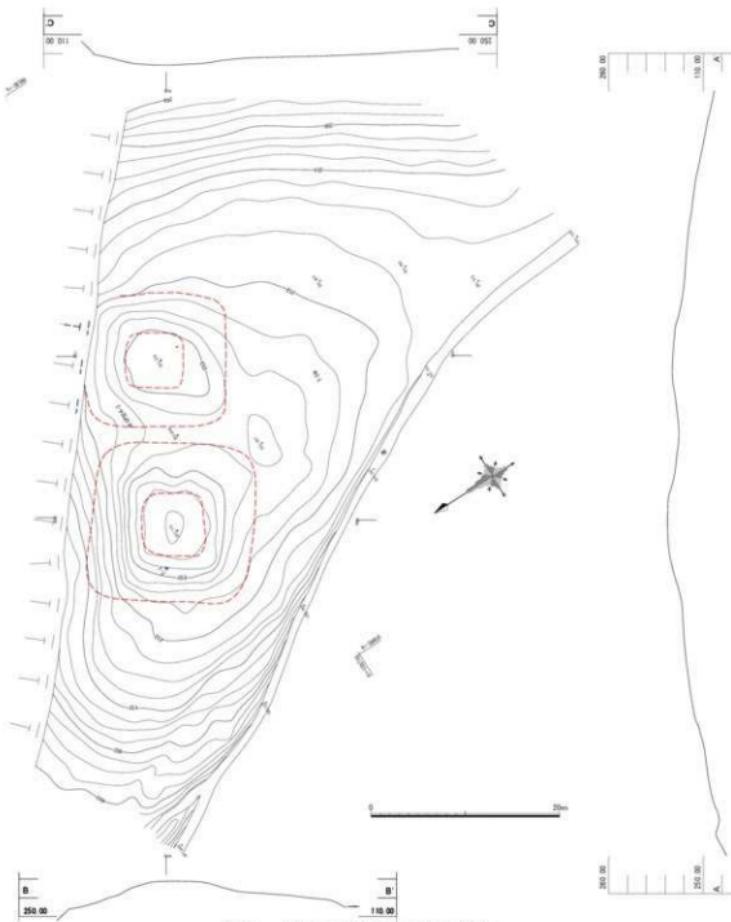
測量調査は、市有地であるため管理担当課の承諾を得たうえで、測量業者に委託して実施した。古墳付近の現状は雑木林で、過去の災害等による倒木も多数所在したことから、事前作業として、測量作業の障害となる立木の伐採を津山市シルバー人材センターに委託して行い、伐採作業終了後に調査担当者の指示のもと測量作業を実施した。調査は、平成 25 年 2 月 27 日から着手し、平成 25 年 3 月 21 日に終了した。

現地での観察では、1 号墳は古墳の北東側は道路開削に伴う法面が墳丘裾に及び、西側は大字界の里道まで緩やかに傾斜している。また、北西側はやせ尾根となり急激に傾斜する。墳丘南側は 2 号墳に接する。周溝の痕跡及び盗掘等による墳丘の変形は認められず、葺石等の外表施設も存在しない。また、墳丘の北半分は比較的盛土が良好に残るとみられるが、墳丘西側から南側にかけては墳丘盛土の流出が著しいため墳端の確認が困難で、人為的な変形の有無の判断も困難であると判断された。

2 号墳については、1 号墳と同様に東側の墳丘裾は道路法面に接している。そして墳丘西側～南側にかけては緩やかに傾斜する地形を呈し、自然地形に至る。このため 1 号墳と同じく、墳端を明確に視認するのは困難であった。また、周溝の痕跡及び盗掘等による変形は認められず、葺石等の外表施設も存在しなかった。



第 8 図 地蔵二つ塚古墳位置図 (S=1/25,000)



第9図 地蔵二つ塚古墳測量図 (S=1/500)

### 3. まとめ

現地踏査と測量成果からみて、地蔵二つ塚古墳の墳丘規模は、1号墳は墳丘盛土が比較的良好に遺存するとみられる、北側尾根上の標高 252.25 m 付近の傾斜変換点を墳頂とみなして一辺約 16 m、高さ約 1.2 m の規模を持つ方墳、2号墳が比較的旧状を残しているとみられる墳丘東側の標高 252 m ~ 252.25 m 付近の傾斜変換点を墳頂とみなし、一辺約 14 m、高さ約 1 m の規模の方墳であると判断される。

ただし、地蔵二つ塚古墳については2基とも墳丘盛土の流出が著しく、規模の把握が困難であり、墳丘規模の確定はかなり困難であることを併記しておく。

また、調査中に遺物等の把握にも努めたが、確認することができなかつた。墳丘測量調査からも築造時期をおさえることのできるデータが得られなかつたため、本墳の築造時期は不明である。

註1 「改定 岡山県遺跡地図」 岡山県教育委員会 2003

註2 仁木康治「高後岩遺跡発掘調査報告」『年報津山弥生の里第14号』津山弥生の里文化財センター 2007

## 第3章 美作国府跡発掘調査

### 第1節 調査に至る経過

平成23年1月に、津山市総社408-1番地において、個人による小規模農地整備事業（ほ場整備）が計画され、津山市教育委員会に施工予定業者から事前協議がなされた。

事業内容は、隣接する若干の高低差のある自己所有水田のうち、農業用機械の使用がしにくい小規模な高位の水田を削平して水田造成を行い、併せて擁壁及び用排水路の整備を行うというものであった。

協議を受けた津山市教育委員会は、計画図等から高位の水田を0.5m以上切り下げる計画であることを確認し、事業予定地が周知の遺跡、「美作国府跡」の遺跡範囲に該当していることを説明した。そして、工事区域のうち削平対象となる部分について、事前に確認調査を実施するよう指導し、調査結果に基づいて取り扱いを決定するよう協議した。

確認調査は、平成23年1月17日に実施した。調査においては、直接影響を受ける最高位の水田の遺構確認を目的とした。調査前の現況は水田であったが、耕土はすでに排土されていた状態であったため、削平予定区域の中央に長さ147m、幅15mのトレンチ1本を設定し、重機で排土したのち、人力で精査を行った。調査面積は約23m<sup>2</sup>である。

確認調査の結果、大小のピットが検出された。また、遺物の所属時期から、古代から中世の時期を考えられ、削平予定個所に遺構が存在することが判明した。

津山市教育委員会は、調査の結果を受け、検出された遺構の取り扱いについて引き続き協議を行った。協議の結果、削平が予定されている高位の水田部分を全面調査することで地権者の了解が得られたことから、工事実施に先立ち緊急発掘調査を実施することになった。

発掘調査は平成23年1月26日に着手し、平成23年2月13日に完了した。発掘調査面積は約181m<sup>2</sup>である。

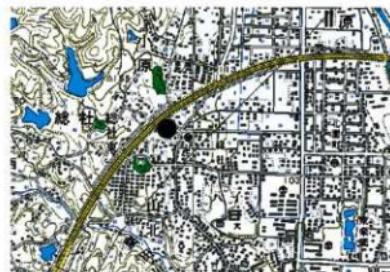
### 第2節 調査の概要

調査位置は、岡山県教育委員会によって、昭和45年から同47年にかけて実施された、中国縦貫自動車道（当時）の工事に伴う発掘調査区域に隣接する位置である。中国道建設に伴う調査では、奈良時代から鎌倉時代初期に比定される、建物、井戸、区画溝などの遺構が確認され、出土した遺構及び遺物から、上級官人の居住域に相当する区画であることが判明している<sup>(注1)</sup>。

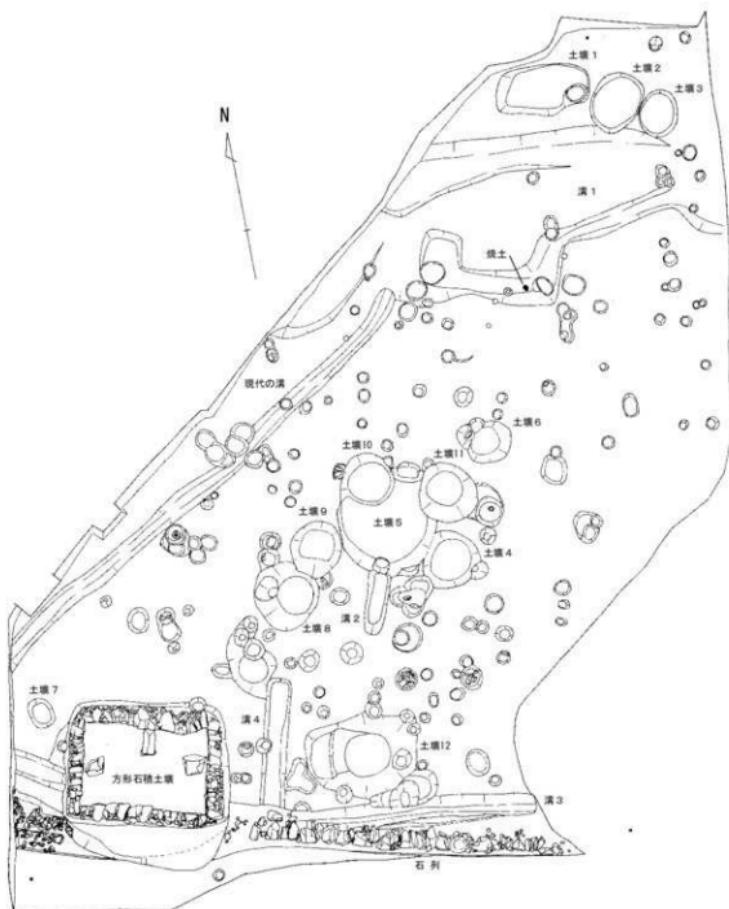
今回の調査位置は、美作国府における奈良時代国衙城の北西角にあたり、区画溝の南隣部分に相当する場所である。調査位置の水田はよく旧状を留めており、加えて確認調査の状況から相当の排土量があらかじめ予測された。このため、調査にあたっては調査期間の短縮を図るためにバッカホーを借り上げ、包含層（2次包含層）を排土した後に、作業員による遺構検出作業と検出遺構の掘り下げ作業を行った。確認された遺構は、溝、石列、土壙、方形石積土壙及びピット多数である。

調査着手当初は、確認調査の状況から遺構密度については比較的粗く、遺構の残存度もあまり良くないと見ていたが、遺構検出作業を進めるにつれ、調査範囲の全てに残存状況の良好な遺構が相次いで検出された。このことは全くの想定外で、工事期間との兼ね合いから極めて調査期間が限られていたため、遺構検出及び発掘作業を最優先で実施した。

また、本調査の実施に際しては、発掘担当者が他事業との兼務で調査に専従ができない状況であったため、



第10図 美作国府跡調査位置図 (S=1/25,000)



第11図 造構配置図 (S=1/100)

隨時文化財センター職員の応援を受けて発掘・記録作業をおこなった。

以下、遺構ごとに記述する。

#### 溝1（第12・23図 図版9・11）

調査区東端で検出された。検出されたのは長さ7m、最大幅3.4mで、検出面からの深さは最深部で0.15mを測る。西から東方向に流れ、調査区外に続く。レンズ状の断面を呈するごく浅い溝である。ただし断面は一定ではなく凹凸がみられる。

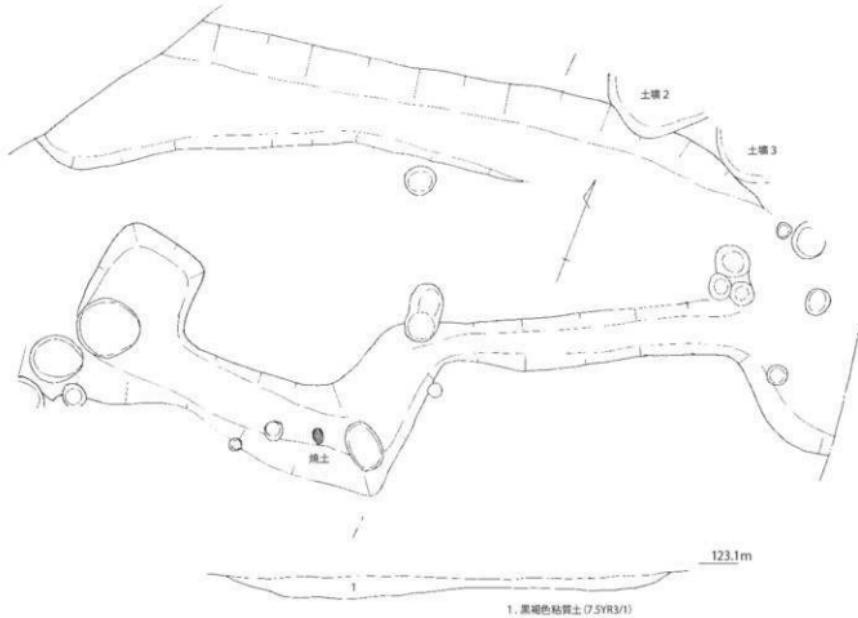
溝の中程においては、部分的にコの字状の落ち込みがみられ、浅い溝を伴っていた。この部分については一部に焼土面も認められ、付近で弥生土器片が出土したことから住居址あるいは工房的な性格を持つ遺構である可能性も調査中に指摘されたが、溝のみであったため明確な判断はできなかった。埋土はほぼ均質で、埋土中から弥生土器、土師器、須恵器、瓦、土師質土器、勝間田焼片が出土した（23図）。出土遺物から、この溝の埋没時期は古代末から中世と判断される。

#### 溝2（第13図 図版9）

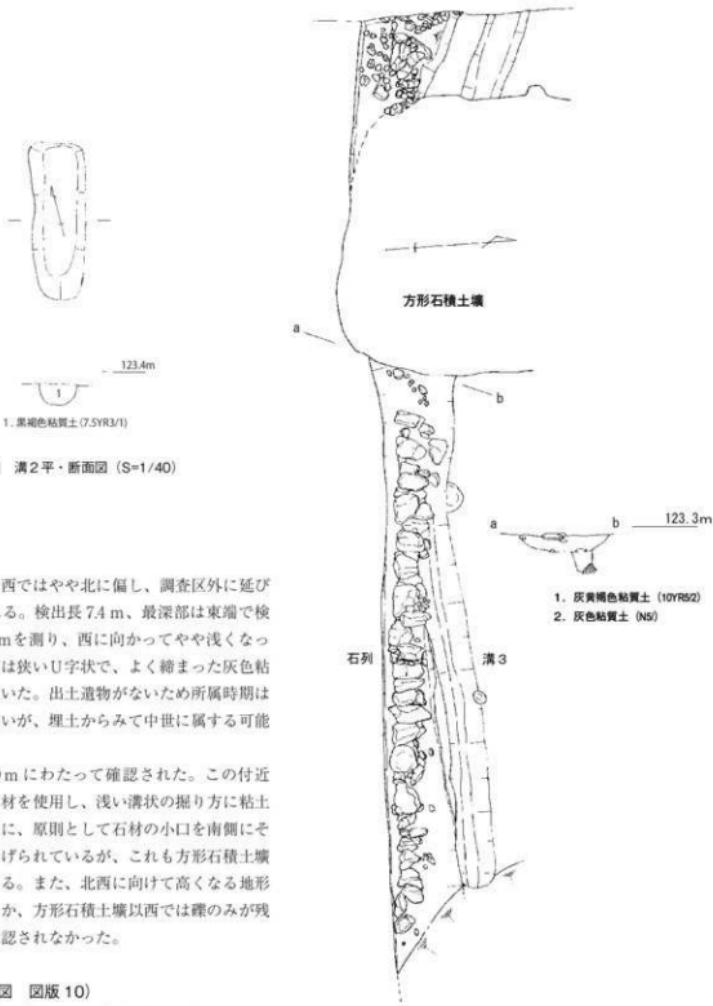
調査区中央で確認された。検出長さ13m、最大幅0.45m、検出面から最深部の深さは0.15mで、断面はU字状である。土壤5に切られている。遺物は出土していないが、遺構埋土から埋没時期は溝1と同じとみられる。

#### 溝3・石列（第14図 図版10）

溝3は、石列と共に調査区南端で検出された東西方向の溝で、方形石積土壤に切られている。また、方形



第12図 溝1平・断面図 (S=1/40)



第13図 溝2平・断面図 (S=1/40)

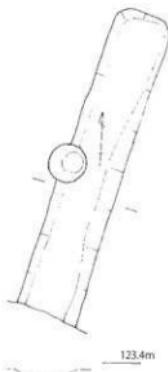
石積土壤より西ではやや北に偏し、調査区外に延びると推定される。検出長7.4m、最深部は東端で検出面から0.6mを測り、西に向かってやや浅くなつてゆく。断面は狭いU字状で、よく締まつた灰色粘土で埋まっていた。出土遺物がないため所属時期ははっきりしないが、埋土からみて中世に属する可能性がある。

石列は約9mにわたって確認された。この付近で産出する石材を使用し、浅い溝状の掘り方に粘土を充填した上に、原則として石材の小口を南側にそろえて積み上げられているが、これも方形石積土壤に切られている。また、北西に向けて高くなる地形との関係からか、方形石積土壤以西では礫のみが残る。遺物は確認されなかった。

#### 溝4（第15図 図版10）

検出長2.4m、幅0.5m、検出面からの深さ0.08mを測る溝である。断面はU字状で、出土遺物もないため詳細な時期は不明。溝3に切られており、溝3よりは古い時期の遺構である。遺構埋土も溝3に近似する。

第14図 溝3・石列平・断面図 (S=1/60)



第15図 溝4平・断面図 ( $S=1/40$ )

#### 土壤4・5・10・11 (第17・23図 図版6・11)

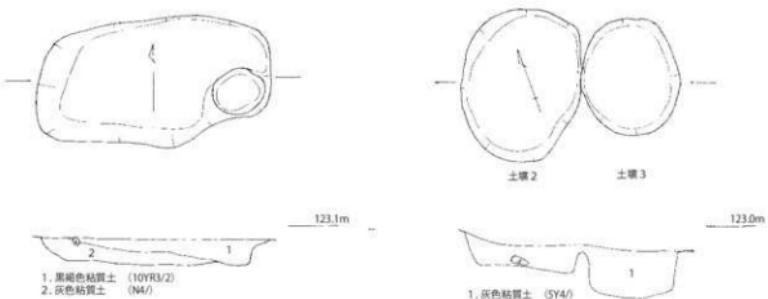
調査区の中央付近で検出された土壤で、土壤6・8・9を併せて1群をなす。土壤4は、長径1.2m、短径1mの楕円形の土壤で、検出面からの深さは0.5mを測る。逆台形の形状を呈する。埋土から弥生土器、須恵器、土師器、近世陶磁器片、古代瓦及び近世から近代とみられる瓦片が出土した(23図)。

土壤5は、径2mを測る、今回の調査区内で最大規模の土壤で、円形プランを呈するが、切り合い関係が著しい。検出面からの深さは0.4mで、なべ底状の断面を持ち、土壤10及び土壤11に切られ、溝2を切る。出土遺物はない。

土壤10は、径1.2m、検出面からの深さ0.5mの円形の土壤で底面は平坦である。掘り方は北半分しか残存しない。遺構埋土から土師器、須恵器、近世陶磁器片のはか、近世から近代とみられる瓦片が出土している。土壤11は、径1.2m、検出面からの深さ0.45mの規模のほぼ円形の土壤で、土壤10と形状が酷似する。埋土からは土師器、須恵器、近世陶器片に加え、碁石が1点出土した(23図)。

#### 土壤6 (第18図 図版7)

調査区中央の土壤群を構成する土壤のひとつで、長径0.9m、短径0.8m、深さは検出面から0.3mの楕

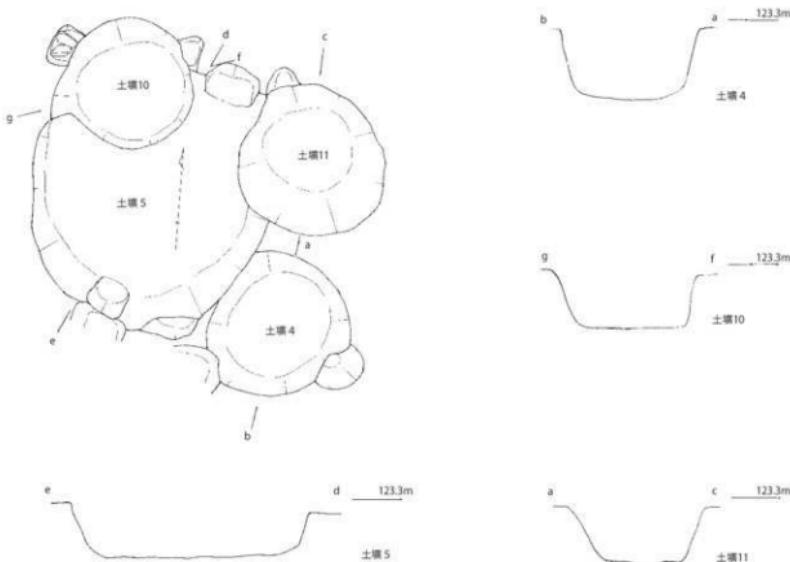


第16図 土壌1・2・3平・断面図 ( $S=1/40$ )

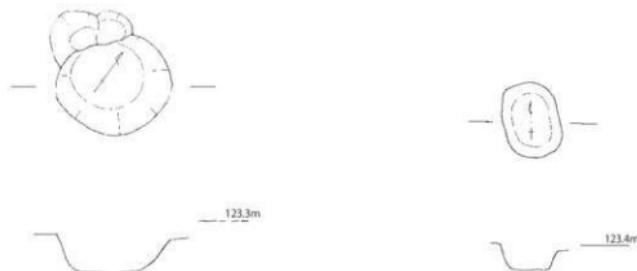
円形の土壌である。周辺の土壤よりやや小ぶりであるが、同様に丁寧に埋められていた。遺構埋土からは、須恵器片が2点、近世から近代とみられる瓦片が1点出土したのみである。所属時期は近世以降とみられる。

#### 土壤7 (第19図 図版7)

調査区西端で検出された、長径0.6m、短径0.45m、検出面からの深さ0.2mの楕円形の小型の土壌である。出土遺物はないが、他の検出土壤と異なり、遺構埋土は暗褐色を呈する。調査区内ではこの土壤のみ時期が異なると考えられ、所属時期としては遺構埋土から古代から中世の時期が考えられる。

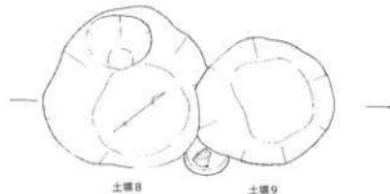


第17図 土壌4・5・10・11平・断面図平・断面図 ( $S=1/40$ )



第18図 土壌6平・断面図 ( $S=1/40$ )

第19図 土壌7平・断面図 ( $S=1/40$ )



第20図 土壌8・9平・断面図 (S= 1/40)

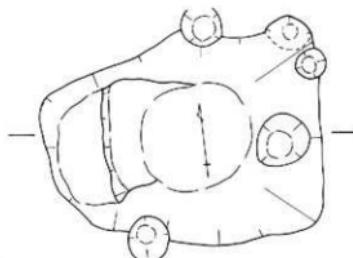
#### 土壌8・9 (第20図 図版8)

調査区中央部分の土壌群を構成する。土壌8は、長径13m、短径1.4mのはば円形のプランで、深さは検出面から0.55mを測る。プラン内の柱穴は土壌に切られたものである。また、土壌9は、長径1.15m、短径1.05mの楕円形のプランを呈する土壌で、検出面からの深さは0.4mである。切り合い関係から土壌8が先行する。土壌8からは、若干の土師質土器及び須恵器片、古代の瓦片とともに、比較的多量の近世から近代とみられる瓦片が出土した。土壌9からの出土遺物はない。

ただし、遺構埋土から2つの遺構の所属時期はほぼ同時期とみられ、近世以降の時期と考える。

#### 土壌12 (第21図 図版8)

調査区南端近くで確認された、長径2.3m、短径1.7mの規模の不定型な、部分的に方形を呈する土壌である。検出面からの深さは125mを測る。規模としては土壌5に匹敵する。プラン内の柱穴は土壌に切られたものである。他の土壌に比べて段違いに深いためか、西側の検出面から0.7m付近にステップ状の段が1段設けられている。底部は比較的湧水が多く、このため遺構埋土はグライ化していた。出土遺物は、若干の土師質土器片とともに、少量の須恵器片と古代及び近世から近代とみられる瓦片が出土した。



第21図 土壌12平・断面図 (S= 1/40)

### 方形石積土壙（第22・23図 図版4・12）

調査区南西端で検出された。当初は擾乱もしくは土壙、のち井戸と認識したが、検出された遺構の規模が大きいことと、遺構の性格が確定できないため、方形石積土壙と呼称する。

遺構は、東西約33m、南北約3.2mで、検出面からの深さ0.4mを測る隅丸方形の土壙の北側から2/3を、深さ1m程度まで方形に掘り下げて底面のレベルを揃えたのち、掘り下げた部分の底面から石材の小口を内側に揃えて護岸状に積み上げている。石積みの規模は、内法で東西約2.6m、南北約1.9mを測り、残存高は最大で底面から約0.7mである。最上面は遺構を埋めた際に除去されたと思われ、レベルは一定しない。したがって元々の高さは不明である。

また、土壙の南側がステップ状に掘り残されたかたちになっているが、発掘時に石材は一切見られなかつた。この部分は、掘り下げ時の状況から、遺構が埋められときには既に掘削されていたとみられるが、石積土壙と関連する可能性と、別途に掘削された可能性がある。発掘時の遺構埋土の状況からは判断するのは困難であるが、後者の可能性が高いと考えられる。

内部には、方形の石が東西に各1個、そして北側中央部に扁平な石が衝立状に直立した状態で1個置かれていた。これらの用途は詳らかではないが、仮に井戸あるいは洗い場的な水利用に関する用途を考えるのであれば、東西のものは踏み石とも解釈できよう。さらに、底面中央には、小石・岩碎及び瓦片がほぼ円形に敷かれていた。

調査時の観察では、この遺構の埋土は、石材レベルより上層は疊交じりの灰色粘土層でやや締まりがなく、下層は水分が多くしまりのない灰色粘質土、そして床面付近では非常にねばい砂交じりの灰色粘質土であった。

遺物は、古代及び比較的多量の近世瓦片に加え、土師器、須恵器、近世陶磁器片、木製椀の小片などが出土した（23図）。この遺構の所属時期は出土遺物から近世以降とみられる。

### ピット

調査区内では、多くのピットが確認されている。ピットからの出土遺物は極めて少ない。ピットは大別して、埋土から暗褐色埋土の弥生時代及び古代～中世と考えられるもの、灰色粘質土が主な埋土である中世のもの、および近世以降の時期が考えられる。一部に柱根や根固め石を伴っているものもあった。

調査段階では判断に至らなかったが、建物等に復元される可能性もあるとみられたことから、整理段階においても検討を加えたものの、建物等にはまとまらなかった。

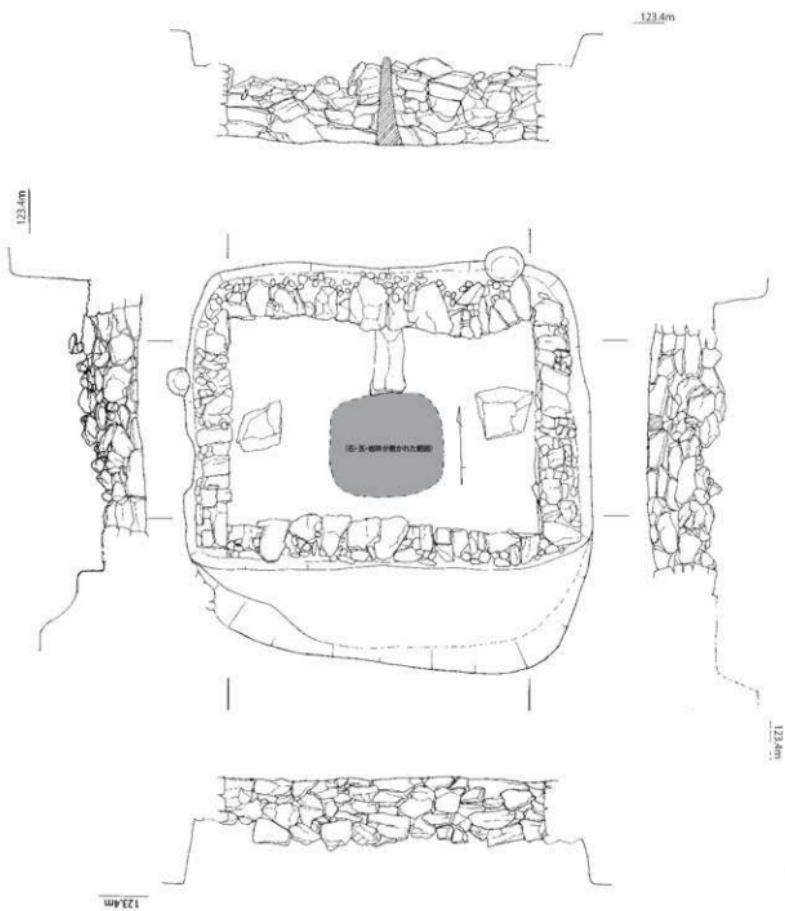
### 出土遺物（第23・24図 図版11・12）

出土遺物は、包含層出土のものが多く、所属時期や種類も広い範囲にわたる。1は勝間田焼塊、2は台付皿の破片である。1は重ね焼の痕跡が明瞭に残り、2は底径8.4cmを測る。溝1からの出土である。

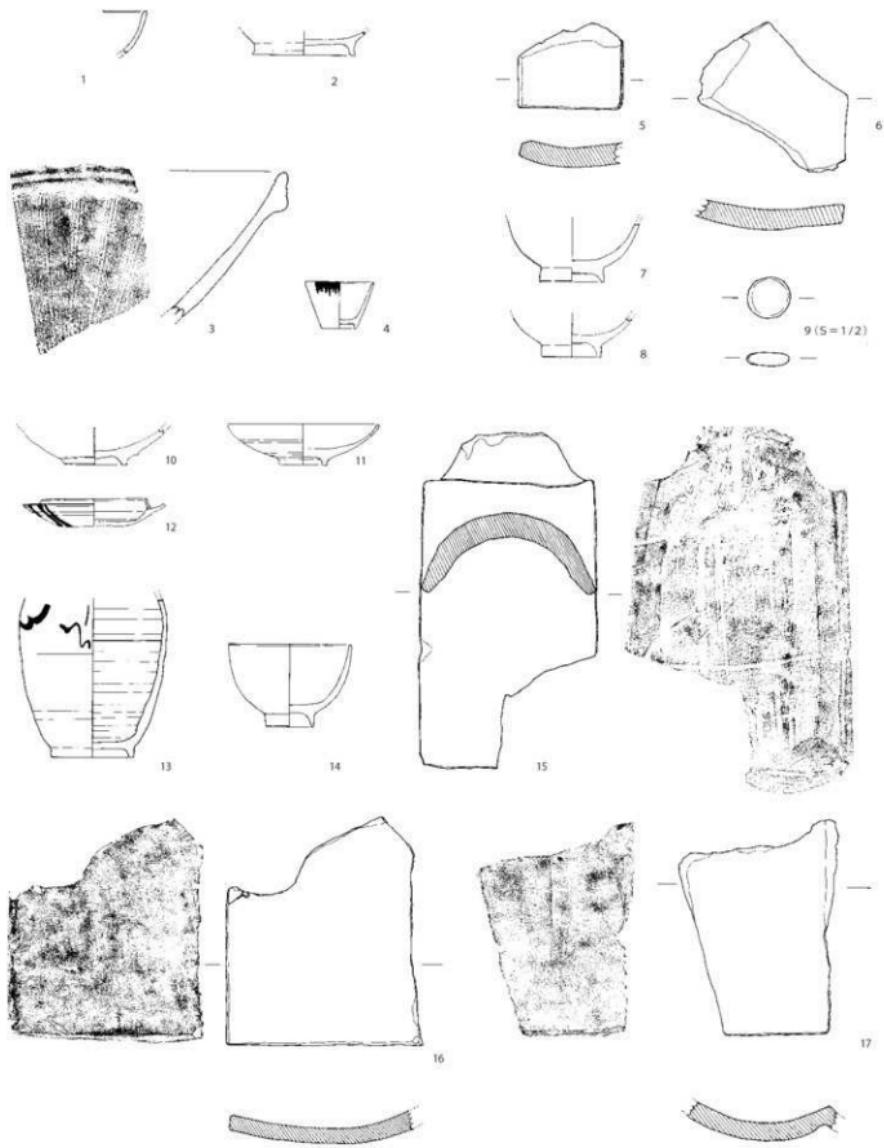
3・4は土壙2・3からの出土品で、3は8条のスリメを持つ備前焼鉢、4は染付の猪口である。5～7は土壙4からの出土で、5・6は瓦片、7は陶器塊である。5の外面は灰白色、6は灰色でやや軟質、7は底径5.8cmを測る。8は底径4.8cmを測る白磁塊、9は芯石で、何れも土壙11から出土した。

10～17は方形石積土壙からの出土で、10・11は陶器皿、12は備前焼の灯明皿の下皿である。12は径11.6cmを測る。13は染付で利とみられる。14は陶器塊で、径10cmを測る。15は丸瓦で、切り離しはコキBである。16は平瓦、17は棟瓦でいずれも明灰白色を呈し軟質である。

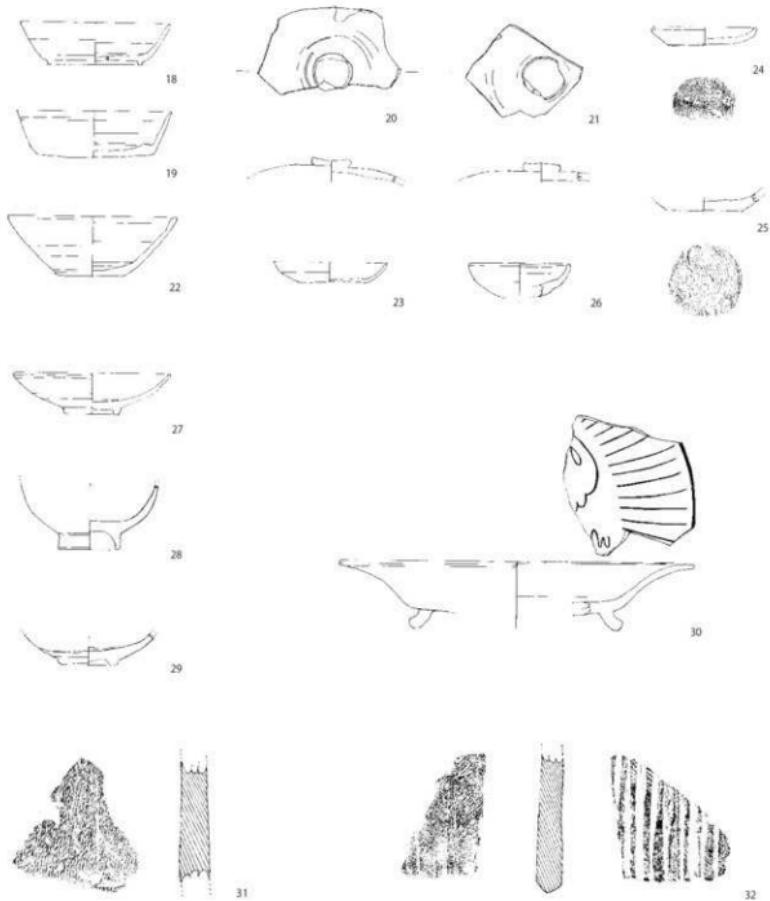
18～32は、確認調査及び包含層からの出土遺物である。18・19は須恵器杯身で、18は径12.3cmで高台が付く。19は灰白色で軟質である。20・21は須恵器蓋である。22は土師器坏で径13.9cmを測り、底部に糸切痕がわずかに残る。23は土師質小皿、24・26は須恵質の小皿、25は皿の底部である。底径6.4cmを測る。27・29は陶器皿、28は陶器塊である。27は径12.8cm、28・29は底径4.9cmを測る。30は径29cmを測る青磁の脚付盤で、龍泉窯系とみられる。31・32は古代に属する瓦片で、31の外面はナデである。



第22図 方形石積土壤平・断面図 ( $S=1/40$ )



第23図 出土遺物（1） ( $S=1/2 \cdot 1/4$ )



第24図 出土遺物(2) ( $S=1/4$ )

### 3.まとめ

今回の調査地点においては、国府存続期に属する明確な遺構を確認することはできなかつたが、古代から近世あるいは近代にわたるこの地の状況に関する資料を得ることができた。

先ず、溝については、溝1、溝2は古代から中世に属し、溝3及び4は時期不明である。加えて、溝1については現段階では溝と判断したが、自然地形の凹部である可能性がある。溝3、溝4については時期が判別しがたいが、遺構埋土から中世に属する可能性があることを指摘しておく。

土壤は、土壤1から3は近世以降、土壤7は埋土から古代から中世のものと考えられる。それ以外のものは、調査区中央付近にまとまって検出された。切り合ひ関係から若干の時期差はあるものの、調査時の観察では、遺構埋土は地山ブロックが多く混入した灰色粘質土であった。何れも丁寧に埋め戻されたとみられ、埋土はよく締まっていた。これらのことから、かなり近接した時に掘削され、利用後は意図的に埋め戻されたものと考えられる。遺構の所属時期は、いずれも出土遺物等から近世以降と判断され、ゴミ穴等の用途も考えられるが、調査地の土壤と他の発掘例から類推して、粘土採取のための土壤である可能性が高い。

方形石積遺構の性格については、現時点では水利用に関する性格を持つ遺構と解釈したい。例えば、井戸、洗い場、水槽、池あるいは蘆池などである。規模はやや異なるが、津山城本丸でよく似た遺構が検出されている<sup>(註2)</sup>。津山城のものは、絵図に「水溜メ」と記載されているとおりの性格のものとみられ、今回確認された遺構も、例えば木製椀が底部から出土しているなどから、同様の性格をもつものとみたい。また、このような遺構が所在するということは、ここが水田化する以前に庶民層以上の居住施設が所在した可能性を示唆するものといえるのではないだろうか。

最後になるが、出土遺物については、弥生土器・土師器・須恵器・瓦・各種の陶磁器片や、椀・柱根などの木製品ほかがコンテナボックスに7箱程度出土している。多くは包含層出土の遺物であるが、十分な検討の時間がとれなかつたことから、ごく部分的な報告しかできなかつた。

註1 小林利晴ほか「美作国府跡 小田中遺跡 山北遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告228』岡山県教育委員会 2011

註2 行田裕美ほか「史跡津山城跡保存整備事業報告書1」津山市教育委員会 2007

## 第4章 西吉田地区試掘調査

### 第1節 調査に至る経過と調査体制

西吉田地区は、津山市南東部に位置する農村地帯である。当該地区内において平成24年度に施工予定のほ場整備事業（実施面積A=7.7ha）が企画された。事業化に先立ち、担当課から工事計画地の埋蔵文化財の所在について照会がなされ、津山市教育委員会は、計画地には周知の埋蔵文化財埋蔵地は該当していないが、計画地周囲に多数の遺跡が所在することから、工事着手前に試掘調査を実施すべきである旨回答した。

以上の経過から、引き続き担当課と協議を行い、遺跡の所在が想定される位置において工事着手前に試掘調査を実施することで合意した。

調査は、計画範囲のうち周辺の遺跡の分布や過去の土地の変更状況等を考慮のうえ、任意の地点18か所を選定してのち、ほ場整備組合と協議を行い、地権者の調査承諾を得たのち着手した。調査期間は、平成23年10月24日～12月2日である。発掘作業は、公益社団法人津山市シルバー人材センターに委託した。

### 第2節 調査の概要

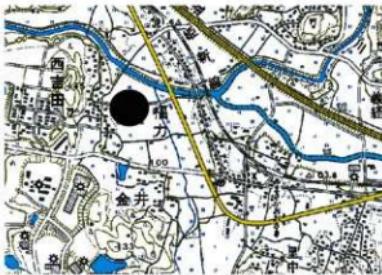
調査位置は、基本的に高位である南及び西から調査位置に向かって徐々に低くなる地形で、最低位部である北方の広戸川が下流の北西方向へ大きく屈曲する位置にあたる低位段丘上に該当する。東端は、広戸川の支流である金川によって区画されるが、金川以東は再び標高が上がり、台地状の地形となる。西端は、西側の丘陵からやや急激に落ち込む地形を呈する。

調査位置の周辺には、より高位の部分に遺跡が確認されている。南西の丘陵上には、西吉田南遺跡（岡山県遺跡番号1115 以下同じ）がある。散布地とされ詳細は不明である<sup>(注1)</sup>。南の丘陵上には、弥生～古墳時代の集落遺跡である金井道田西遺跡（1096）がある。発掘調査によって竪穴住居址、建物、段状遺構、土塙、井戸、炉などが確認されている<sup>(注2)</sup>。

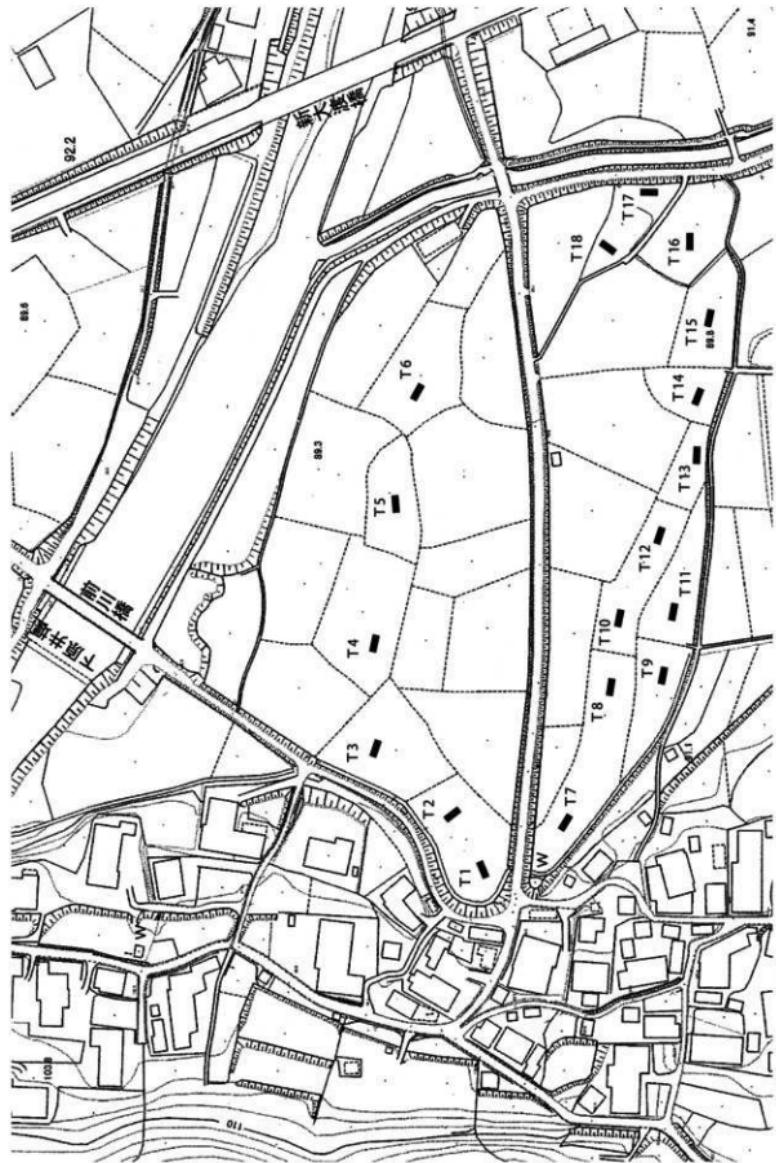
また、金川を隔てた東の台地上には、弥生時代の集落遺跡である中原遺跡（1126）がある。発掘調査により、竪穴住居址、土塙墓、建物などが確認されている<sup>(注3)</sup>。このほか、調査地西側の丘陵地一帯では、津山中核工業団地ほかの造成に伴って多数の遺跡が確認され、それぞれ発掘調査が行われている<sup>(注4)</sup>。

調査にあたっては、地形等を考慮して任意の位置に選定した18か所のトレンチを人力で掘り下げ、遺構の有無を確認した。遺構が認められない場合は、部分的にサブトレンチで順序の確認を行った。各トレンチの規模は、全て2m×5mを基本としたが、崩落等の要因により若干規模が拡大したものがある。調査面積は総計で約180m<sup>2</sup>である。

また、調査トレンチの設定範囲が比較的広く、個所数が多めであったことと、部分的に湧水や軟弱な土質が認められたことから、調査完了後の埋戻しは全てのトレンチの発掘完了を待たずに行つた。具体的には調査の進行状況に合わせて、T-1からT-6、T-7からT-12、T-13からT-18の3回に分けて実施し、ランマー等を併用して全て人力で埋め戻しを行つた。以下、各トレンチについて述べる。



第25図 西吉田地区試掘調査 調査位置図 (S=1/25,000)



第26図 トレンチ配置図 (S=1/2,000)

#### T-1 (第27・30図 図版14・16)

T-1からT-6は段丘面もしくは微高地状の箇所に設定したトレンチである。T-1は谷地形が急激に落ち込む位置に南北方向に設定したトレンチで、耕土以下は灰色粘質土が一定の厚さをもって堆積するが、トレンチ最下端では縮まりがなく、水分に富む状態となる。遺構は認められなかった。遺物は、耕土から土師質土器片、近代から現代に属する陶磁器片など、また3層から勝間田焼の小片(30図)が出土した。

#### T-2 (第27図 図版14)

T-1の北隣に設定した。耕土以下の堆積状況及び土の性状はT-1と近似するが、下層は砂質でやや縮まりがない。何れも自然堆積とみられ、遺構は検出されていない。遺物は、耕土から須恵器の小片、3層から備前焼の小片が出土した。

#### T-3 (第27・30図 図版14・16)

T-2の更に北方に設定した。尾根突端が急激に落ち込んだ位置である。耕土及び下層は安定した堆積状況を示し、以下はやや不整合な堆積状況であるが、何れも自然堆積と判断した。出土遺物は2層から鉄滓、須恵器、染付の小片が出土し、3層から土師質土器片、勝間田焼片(30図)、青磁片が出土した。遺構は検出されなかった。

#### T-4 (第27・30図 図版14・16)

T-3の東側、ほぼ同一標高の位置に設定したトレンチで、耕土以下は均質な堆積状況を示す。T-4からT-6まではやや微高地となる。サブトレンチで地表から約90cmまで掘り下げたところ、礫層がみられたことから河床に近いものと判断し、以下は掘り下げていない。遺構はない。遺物は、古墳時代から古代に属する須恵器片、近代から現代に属する陶磁器、軟質の瓦片などが耕土中から出土し、3層から須恵器片(30図)、陶器及び染付の小片が出土した。

#### T-5 (第27図 図版14)

T-4の東隣に設定したトレンチである。耕土および下層は安定した堆積状況を示すが、サブトレンチでは最下層で砂礫層がみられる。何れも人為的なものではないと判断された。付近は微高地であるため、自然堤防かもしれない。遺物は上層に限られ、器種不明の土師質土器片、須恵器及び陶磁器の小片が出土した。遺構は認められなかった。

#### T-6 (第27図 図版14)

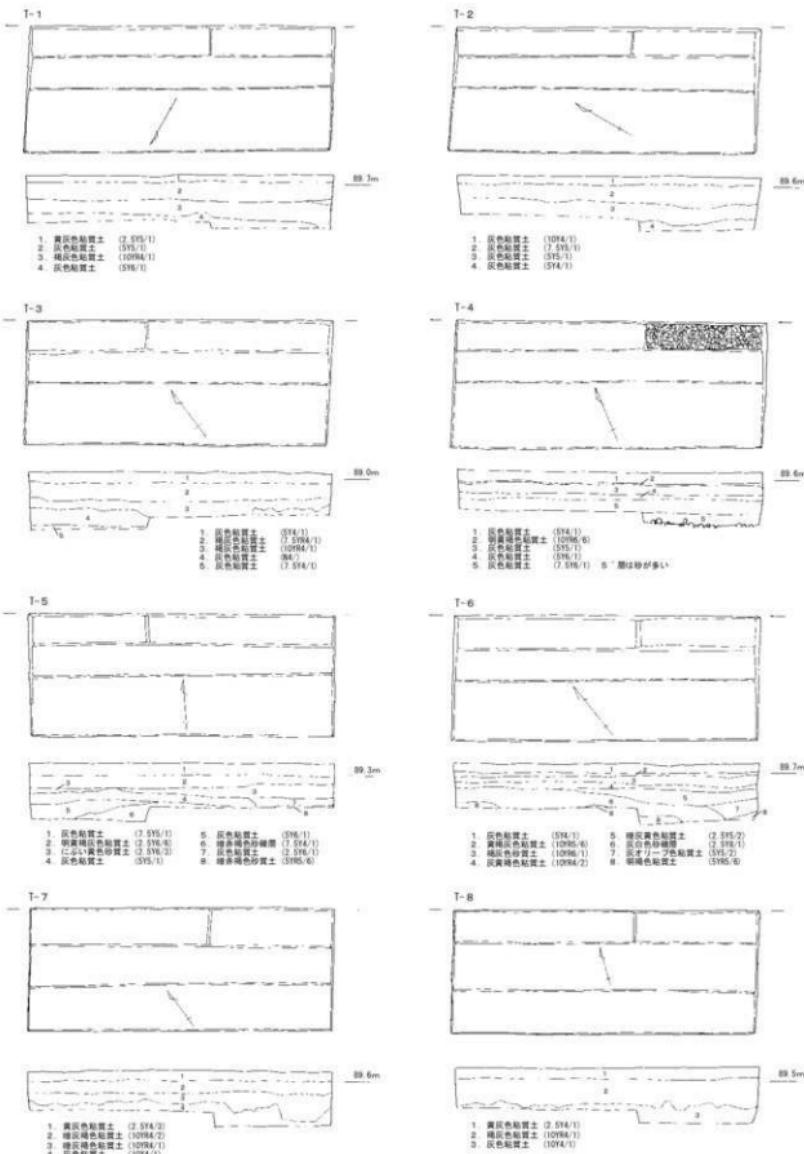
T-5の東、金川との合流点に近くに設定したトレンチである。耕土以下0.4mまでは比較的均質な堆積がみられ、新田2時期の耕土層が認められた。以下は概ね東に向かって下降する。微高地地形の東端にあたるためかと思われる。何れも自然堆積と判断された。遺物は4層まで、瓦と思われる小片、高台付きの皿片、染付及び陶器の小片ほかが出土している。遺構はない。

#### T-7 (第27図 図版14)

T-7以降は用地の南側で、段丘崖に近い位置である。T-7の耕土以下は、T-1と同じく谷地形であるため相対的に堆積土の粘性が高い。堆積状況から以前は湿地状であったと判断される。遺物は低い層位でも検出され、弥生土器、須恵器及び陶器片が3層・4層で出土した。遺構は確認されていない。

#### T-8 (第27図 図版14)

T-7の東側の水田に設定したトレンチである。耕土以下の堆積状況もT-7とほぼ同様で自然堆積と判断した。2層下端の凹凸は植物遺体の伴うものとみられる。遺物は耕土及び2層のもので、3層は無遺物層



第27図 トレンチ平・断面図(1) (S=1/80)

である。勝間田焼壇の口縁部分や染付等の陶磁器片、近世から近代に属する瓦の小片が出土した。遺構はない。

#### T-9 (第28図 図版15)

T-8の南側、や段丘崖よりに設定したトレンチである。粘性の高い粘質土が平均に堆積に、下層に帶状の微砂を多く含む層がみられる。地表から約12mで砂礫層に至る。遺物がみられたのは4層までで、以下は無遺物層であったため堆積状況確認のための掘り下げとした。須恵器、備前焼擂鉢片、近世から近代に属すると思われる陶磁器及び瓦の小片が出土している。遺構は確認されなかった。

#### T-10 (第28図 図版15)

T-8の東に設定したトレンチである。堆積状況はT-7、T-8と同様で、粘性の高い土層が自然堆積したものと判断された。3層下端の凹凸は、T-8と同様のものである。遺物は土師質土器、須恵器片、近世から近代の擂鉢・陶磁器及び瓦片が出土した。遺構はない。

#### T-11 (第28・30図 図版15・16)

T-9の東隣りに設定したトレンチで、土層の堆積状況はT-9と大差なく、何れも自然堆積と判断される。トレンチ最下層では砂礫層に至ることも同様である。遺物は3層からの出土で、土師質土器、須恵器、勝間田焼(30図)、陶磁器片、近世～近代の瓦片及び土錘(30図)が1点出土した。遺構は確認されなかった。

#### T-12 (第28図 図版15)

T-10とT-13との間に設定したトレンチである。堆積状況は自然堆積で、特筆される点はない。3層から近世～近代に属すると思われる陶器及び瓦片が少量出土した。遺構はない。

#### T-13 (第28図 図版15)

T-12の東側に設定したトレンチである。今回の調査位置では段丘崖に一番近い。このためか西側に向かってやや層が厚みを増す傾向がみられた。出土遺物はなく、遺構も認められなかった。

#### T-14 (第28図 図版15)

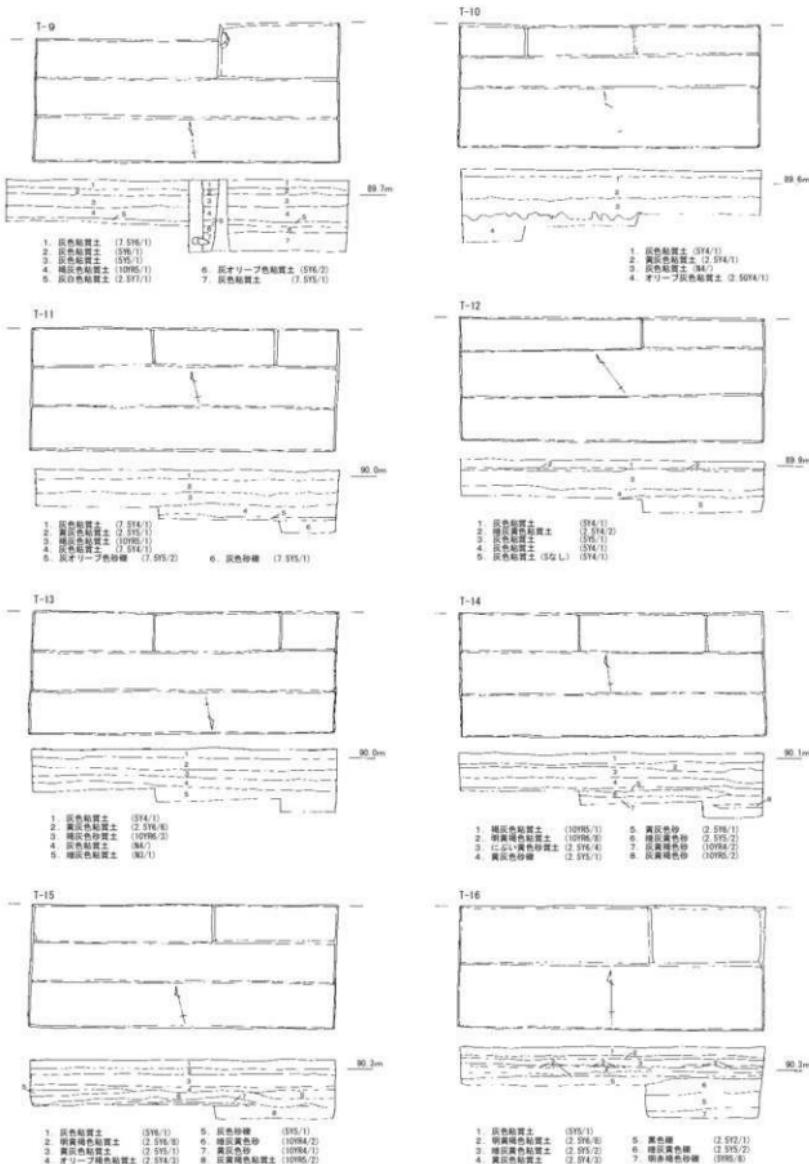
T-13の東に設定したトレンチである。この付近のトレンチでは、後出すT-15・16と同様にやや複雑な層序を示すが、人為的な造成行為によるものとみられ、少なくとも3層までは造成に伴うものと判断される。遺物は土師質土器、須恵器片、近世から近代に属する陶磁器片が数点出土したが、全て耕土からの出土である。遺構は確認されなかった。

#### T-15 (第28図 図版15)

T-14の東側のトレンチで、3層以下はやや層序的に乱れている。基本的に自然堆積であるとみられる。遺物は耕土から弥生土器と磁器片が数点、6層から須恵器片が1点出土と、耕土中から弥生後期の口縁部が出土した。遺構はない。

#### T-16 (第28図 図版15)

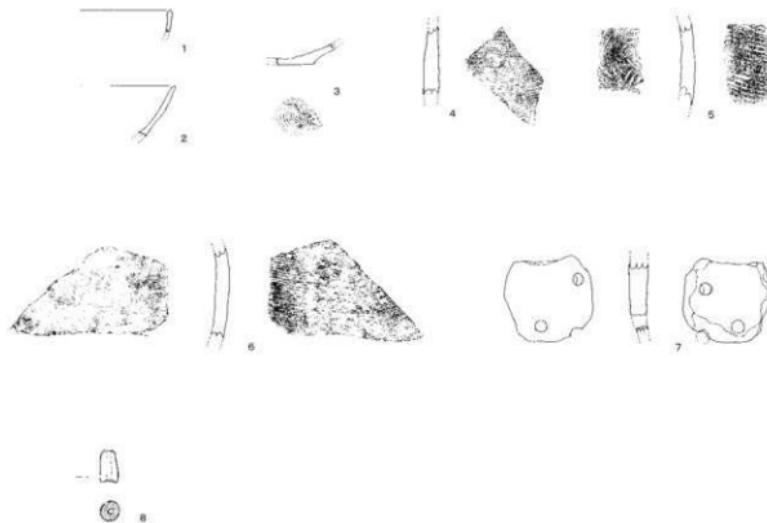
T-15の東側に設定したトレンチで、T-16以降は、広戸川支流の金川により近い。層序はやや複雑であるが、少なくとも3回の耕作層を確認することができる。時期的には比較的最近のもので、以下は自然堆積とみられる。遺物は、古墳時代から古代に属すると思われる須恵器片が耕土中から確認されたのみである。遺構も確認されなかった。



第28図 ドレンチ平・断面図(2) (S=1/80)



第29図 トレンチ平・断面図 (3) (S=1/80)



第30図 出土遺物 (S=1/4)

#### T-17 (第29・30図 図版16)

支流の金川に一番近接したトレンチで、耕土以下に相当量の客土が入り、土地のかさ上げがされている。少なくとも2回の耕作層が認められるが、古いものではないと判断した。地表から約1mで礫質土が検出されるが、自然堆積と判断した。遺構はない。遺物は、耕土及び2層から染付はか近世～近代に属する陶磁器片が、また6層から穿孔された弥生土器片(30図)が出土している。

#### T-18 (第29・30図 図版16)

層序的にやまとまりを欠くが、基本的に自然堆積とみられる層序で、遺構はない。トレンチ下層は流水に伴う着色がみられる。遺物も散発的で、耕土から近世から近代の瓦片、4層から5層にかけて勝間田焼片

(30図)、備前焼、産地不明の陶器及び染付の小片が、7層から土師器の口縁部片(30図)が出土した。

#### 出土遺物(第30図 図版16)

出土遺物については、トレンチ毎に述べた以外に、図示可能なものについて一括して報告する。1は、勝間田焼塙の口縁部である。焼成は良好で重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。T-1から出土した。2は土師器の口縁部で高坏と思われる。3は勝間田焼塙の底部で、底部に糸切痕が明瞭に残る。いずれもT-18から出土した。4・6はいずれも勝間田焼片で、壺と思われる。4はT-3、6はT-11から出土した。5はT-4から出土した須恵器片で器種は壺か。7はT-17から出土した弥生土器片で3か所に穿孔が認められる。表面裏面とも磨滅が著しく、全く観察できない。器台型土器の脚部かと思われる。8は土錘で、約1/2を欠損する。T-11から出土した。

### 第3節　まとめ

調査の結果、一部のトレンチにおいて耕土下層に水田面造成による改変は認められたものの、以下は広戸川の氾濫等に伴うと思われる粘土もしくは砂礫の自然堆積層である状況が認められた。

今回の調査においては、全てのトレンチにおいて遺構(面も含めて)は確認されず、このことから広戸川の低位段丘にあたる用地内は氾濫原であり、遺跡は所在しないことが明確になった。

また、出土遺物についても、耕土ほかの各層から弥生土器、須恵器、近現代の陶磁器及び瓦片が出土したが、全て流れ込みによるものと判断した。

今回の調査位置においては、事前の地形等の観察から遺跡の分布が想定されたが、調査結果を敷衍した遺跡の分布は、この周囲においては調査地点付近のような低位には分布せず、高位段丘上から丘陵にかけて分布することが再確認された。

註1 「改定 岡山県遺跡地図」岡山県教育委員会 2003

註2 保田義治「金井淀田西遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第39集」津市教育委員会 1991

註3 田仲満雄「津市大崎中原遺跡」「岡山県埋蔵文化財報告3」1973

内藤善史「中原遺跡ほか」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告73」1989

保田義治「中原遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第37集」津市教育委員会 1990

註4 河本 清「金井別所遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第25集」津市教育委員会 1988

保田義治「柳谷古墳」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第24集」・津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告1・津市教育委員会 1988 以下9分冊で刊行されている。

行田裕美「西古田遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第17集」津市教育委員会 1985

行田裕美ほか「西古田北遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第58集」津市教育委員会 1997



国分寺飯塚古墳全景（北東から）



龍王塚古墳全景（南西から）



大日古墳全景（北西から）



地蔵二つ塚古墳全景（南から）



調査地遠景（南東から）



調査区全景（西から）



方形石積土壙（南から）



同 (南東から)



土壤1（南東から）



土壤2・3（北東から）

図版 6



土壤4（南西から）



土壤5・10・11（西から）



土壤6（西から）



土壤7（南西から）

図版 8



土壤 8・9 (西から)



土壤 12 (南から)



溝1 (東から)



溝2 (南から)

図版 10



溝3と石列（東から）



溝4（北から）



作業状況（西から）



出土遺物（1）

図版 12



出土遺物（2）



調査位置南半遠景（東から）



調査位置北半遠景（東から）

図版 14



T-1 (北から)



T-2 (北西から)



T-3 (南東から)



T-4 (西から)



T-5 (東から)



T-6 (北西から)



T-7 (北東から)



T-8 (西から)

図版 15



T-9 (西から)



T-10 (東から)



T-11 (北西から)



T-12 (北西から)



T-13 (東から)



T-14 (西から)



T-15 (西から)



T-16 (西から)

図版 16



T-17 (南から)



T-18 (南西から)



作業状況 (T-2) (南から)



作業状況 (T-16) (北西から)



出土遺物

## 報告書抄録

---

## 津山市内遺跡調査報告書

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第83集

2014年3月31日 発行

発行 津山市教育員会文化課

津山弥生の里文化財センター

〒708-0824

岡山県津山市沼600-1番地

T E L 0868-24-8413

F A X 0868-24-8414

印刷 (株)廣陽本社

---